

# 今治歴史散歩

大成経凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第31回は、今治市桜井地区に二つある綱敷天満神社（古天神・新天神）を紹介し、その由来を歴史散歩したいと思います。

## 第31回 二つの綱敷天満神社

### ●今治地方の道真伝説

『愛媛県神社誌』によると、菅原道真を祭神とする神社は今治市内で27社を数え、このうち7社は道真が訪れた伝説に基づき創建されています。

道真（845～903年）は平安時代の貴族・政治家で、30歳代で学者最高位の文章博士に就くなど聡明だったことから、後に「学問の神様」と称されます。地方官として讃岐国の国司に就いた際は、隣国伊予の視察で今治地方にも立ち寄ったようです（888年）。玉川町葛谷と別名・片山の天満神社、大西町星浦と延喜の天満宮は、この時の訪問を由緒に創建されています。星浦は、視察団が風待ちなどで碇泊したことから碇掛天満宮とも称されます。

その後、道真は京に戻って宇多天皇に重用され、右大臣にまで昇進しました。彼の政策は、遣唐使の廃止（894年）がよく知られています。しかし、左大臣・藤原時平らの陰謀で失脚し（901年）、京の都から九州の大宰府へ左遷となり、そこで亡くなりました（903年）。

桜井浦に立ち寄ったのは、左遷途中の海上が時化に遭った時とされます。村人が丁重にもてなそうと船具の綱を敷物にしてお迎えしたことが、後に社名の由来となります。また、避難中に濡れた衣服を乾かした岩は、衣干岩の名で今に伝わります。左遷中に時化で避難した伝説は、県内では四国中央市や松山市などに数か所あります。

### ●今治藩庇護の古国分村天満宮

道真の死後、天皇家は不幸事が続き、時平の子孫も断絶。皇居にあたる清涼殿は落雷に遭い、多数の死傷者が出ました。人々はこれを道真の怨霊と信じ、道



梅が咲き誇る古天神の境内（桜井1丁目／天神ヶ原）  
※かつて住所表記は古国分でした



松平定芝揮毫の社号額  
（古天神の社殿内  
／定芝は8代藩主）



文学碑が多い新天神の境内（桜井6丁目／志島ヶ原）  
 ※江戸後期・幕末期の皇族・公卿の歌碑、江戸後期の俳人の句碑など、同地ゆかりの作品を楽しめます

真を天神に神格化してこれを鎮めようと、京に北野天満宮を建立しました。これにあやかるかのように、道真ゆかりの土地には天満神社が後世になって創建されていきます。

もともと桜井地区には、古国分村の天神ヶ原に天満神社はあり、国分・古国分・桜井・旦の4村の氏神でした。江戸時代に今治藩主となった久松松平氏は道真の子孫にあたるため、藩主霊廟にも近い同村天満神社の庇護に努めます。今治藩政史を記した『今治拾遺』や『国府叢書』などによると、藩主が霊廟参りに併せて同村天満神社を参詣し、式年祭や社殿修繕の経費を藩費で賄ったことがわかります。綱敷、の呼称は、江戸後期以降に見られるようになります。

## ●古天神と新天神の誕生

宮出しは宝永7（1710）年からが始まったようですが、正徳3（1713）年の祭礼で神仏習合を背景とする奇妙なトラブルが発生します。神主が神前に魚類の鰯を供えたことが、同社を監督する立場の国分寺との間で争論を引き起こし、享保4（1719）年までの7年間は宮出しが禁止となったのです。

これに困ったのは、松山藩領に住む桜井村と旦村の氏子らです。引き続き祭礼を行うため、古国分村の天満神社から分離。志島ヶ原にあった荒神社へ、太宰府天満宮から分霊を勧請し、荒神天神として祀るようになりました。そもそも桜井地区は、関ヶ原合戦後の領地再編などで、国分村と古国分村は今治領、桜井・旦・登畑・宮崎・長沢・孫兵衛作の村々は松山領となっていました。松山藩主も道真子孫の久松松平氏で、こちらは3万5千石の今治藩に対して大藩の15万石を誇りました。

ところが、明和2（1765）年に藩主の不祥事で領内1万石を幕府に収公されることになり、これに該当したのが越智郡・周桑郡の村々でした。越智郡は桜井地区の6村と朝倉地区の2村がこれに該当し、港湾をもつ桜井村が1万石天領の年貢米積出港となりました。文化15（1815）年には松山藩に管理を委ねる松山藩預地となりますが、天領の拠点となった桜井は廻船の往来など経済活動が活発となります。そして、松山藩の庇護と椀舟行商人らの寄進によって、境内には立派な社殿・絵馬堂・石造物・文学碑などが建立されていくのでした。

こうして、2つある綱敷天満神社は、前者を古天神、後者を新天神と称するようになり、古天神は郷社、新天神は県社の社格を有して今日に至ります。両社とも、境内には道真が愛した梅林を有し、神紋は久松松平家の家紋と同じ星梅鉢紋であります。



衣干岩と記念碑（桜井河口港そば）  
 ※揮毫は太宰府天満宮ゆかりの書家・宮小路康文